

氏名	ヤマモト ミキコ 山本 美樹子
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第215号
学位授与年月日	平成24年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉ローベルト・シューマン《ヴァイオリンソナタ第3番イ短調》 Wo02作品論 〈演奏〉L.V.Beethoven: Sonate f"ur Klavier und Violine No.10 G-dur Op. 96 R. Schumann: Fantasie Cdur Op. 131 R. Schumann: Sonata f"ur Klavier und Violin No. 3 a-moll Wo02

総合審査委員

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	松原 勝也
(副査)	"	"	(")	伊藤 恵
	"	"	(")	大角 欣矢
	"	名誉教授		岡山 潔
	国立音楽大学	教授	(")	藤本 一子

(論文内容の要旨)

ローベルト・シューマン Robert Schumann (1810~1856) は、19世紀の音楽社会において「詩的な新しい時代」をスローガンに掲げ、生涯を通じて評論、作曲の両面で新しいものを築き上げようと模索し続けた。彼がヴァイオリンとピアノのためのソナタの領域に初めて足を踏み入れたのは、創作活動後期の1851年のことである。この年には《ヴァイオリンソナタ第1番 イ短調》作品105および《ヴァイオリンソナタ第2番 ニ短調》作品121が書かれ、1853年には《FAEソナタ》と《ヴァイオリンソナタ第3番 イ短調》Wo02が生み出されている。このうちの《ヴァイオリンソナタ第3番》は特に演奏機会が少なく、受容に問題を抱えた作品である。その最大の理由は、聴取法が確立されていないことであろう。すなわち、従来の音楽の聴き方では、その特殊性に内在する面白みを見つけることは難しいのである。それでも筆者は、《ヴァイオリンソナタ第3番》に後期シューマンの革新性を見出し、そこから生起する音楽的充実度にこそ、彼の後期音楽の本質が表れていると考えている。また、そこに要請される高度な技術と深い音楽表現は、ヴァイオリン奏者にとって特別な存在感を放つものであるとも感じている。そこで以下の方法により、これらの論証を試みた。

第1章においてデュッセルドルフ時代の音楽活動を概括した。シューマンがこの地で初めて取り組んだ指揮活動はその創作媒体を広げ、多様なジャンルで数多くの作品が生み出されることとなった。その中でもヴァイオリンを含む作品がこの時期に集中して生み出されている点に着目し、詳しく考察した。

第2章では、それらの創出に大きく関与したシューマンと同時代のヴァイオリニスト、フェルディナント・ダーヴィト、ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヴァジエレフスキ、ヨーゼフ・ヨアヒムについて述べた。三人の生涯と音楽上の功績を明らかにし、シューマンの創作にどのように関わったのかを検証した。

作品の考察として、第3章では《ヴァイオリンソナタ第2番》第1楽章の様式分析を行い、ソナタ形式の枠組みの中にある斬新さを抽出した。そこで行われているのは、動機の垂直、水平方向の貼り合わ

せによる「時間の対位法」とセクションのネットワーク構造による「交響的叙事性」である。これは、バッハの伝統的な規範や古典的ソナタ形式を重んじながらもそれを拡大し、新しい詩的な音楽を追究したシューマンの新境地を示すものである。ヴァイオリンソナタというジャンルが後期の創作において重要な意味を持つという主張の根拠の一端を、ここに提示することができたと考えている。

その方法を踏襲する形で、第4章において《ヴァイオリンソナタ第3番》第1楽章の様式分析を行った。その結果、同じ要素から派生した複数の動機が、有機的な関わりを持つことなく2次元上で並列されるという、第2番ソナタとは異なる動機の貼り合わせ手法がとられていることがわかった。二つのヴァイオリンソナタの形式構造の違いが明らかにされることで、2年の月日がもたらした音楽的開展が浮き彫りになったのである。そして、この音楽の在り方を理解するためには、水平方向ではなく垂直方向への聴取の意識が必要であるとの考えに至った。また、2次元的であるからと言って音楽全体が平面的なわけではなく、そこには奥行きや厚みを感じられるのだということも主張した。

第5章において、演奏の観点から再度二つの作品の考察を行った。ここではロラン・バルトの言説に着想を得て、「打つもの」と演奏表現との関係を探った。《ヴァイオリンソナタ第2番》第1楽章では旋律の下に打つものは潜み、立体的な時間構造の構築に寄与している。一方《ヴァイオリンソナタ第3番》第1楽章では様々な打つ要素が表出し、アクセントを打つことで外へ向かう一方、身体の内側に向かってリズムを刻んでいる。ここに演奏の際に生じる感覚と、分析から見てきた奥行きの関与が確認され、シューマンの音楽の身体性が規定された。しかし《ヴァイオリンソナタ第3番》の第4楽章においては、打つものの存在がヴァイオリンのヴィルトゥオーソ的な奏法によって拡散され、幻想性が獲得されている。ここに全く新しいヴァイオリンソナタの姿が浮かび上がった。

本研究は《ヴァイオリンソナタ第3番》の特殊性の中にある音楽の素晴らしさを示したいという思いから始まった。しかし特殊である以上、それがシューマンの斬新さを表すものであるという点では理解されたとしても、全ての人が良いと感じるわけではないだろう。そのような個人性こそがシューマンの音楽の本質であるに違いないが、それでも第3番のソナタが特別な作品であると言いたかったのは、演奏する際に確かに感じられる打つ音が、筆者の身体を捉えて離さないからである。これを伝えるためには、演奏に対する意識を高め、表現を可能とする技術を習得することが求められるだろう。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、近年その評価が高まり研究が進みつつあるシューマンの後期器楽作品の革新性と魅力を、演奏者の立場から提示しようというものである。

申請者はヴァイオリンソナタ3番に焦点をあて、同作品が創作されるにいたる様々な背景を多くの一次資料から読み解き、ソナタ第2番、3番の極めて精緻な分析・比較によって新しいシューマンが到達した新しい音楽形式を明らかにした。また、それらの分析に基づく細密な演奏論ではロラン・バルトのテキストを踏まえ、実践的かつ、音楽的内容と深く結び付いた技術的な模索、即ち、演奏家としての体感を言語化するという極めて困難な考察を通して、さらに作品の核心へ迫ってみせた。学位審査会における演奏ではこれらの分析・演奏論が見事に裏付けられ、改めてシューマン後期作品の魅力を十二分に味わうことができた。

実技系の論文として極めて優れたものであるだけでなく、今後のシューマン研究に大きく寄与する成果をあげた事は高く評価される。よって総合審査の最終成績を秀とし合格と認める。